

山田寛著

『ボル・ポト＜革命＞史——虐殺と破壊の4年間——』

講談社 2004年 232ページ

あまかわ なおこ
天川直子

著者は、読売新聞記者としてサイゴン支局（1972年12月～74年11月）やバンコク支局（77年11月～81年3月）に駐在した経験を持つ。すなわち、ボル・ポト政権の成立と崩壊の両方を、ジャーナリストとして取材する巡り合わせとなった。カンボジアにひかれた著者は、国際報道の一線を退くと、David P. Chandlerの*Brother Number One: A Political Biography of Pol Pot*, Boulder: Westview Press, 1992（邦訳は『ボル・ポト伝』めこん 1994年）と、*Voices from S-21: Terror and History in Pol Pot's Secret Prison*, Berkeley: University of California Press, 1999（邦訳は『ボル・ポト 死の監獄S21——クメール・ルージュと大量虐殺——』白揚社 2002年）を訳出した。

本書は、これらの蓄積の上に書かれた、魅力的かつ便利な書物である。本書の魅力は、何よりもまず、著者の新聞記者時代の取材エピソードや諸文献の引用などを自在に用いて、ボル・ポト派の栄枯盛衰を生き生きと具体的に描き出したところにある。加えて、カンボジア現代史に関する先行研究、特に英仏語文献を十分に消化して、実に手際よくカンボジアの現代史がまとめられている。もちろん、本書の目的は表題にあるとおり「ボル・ポト革命」の通史であり、カンボジア現代史ではない。しかし、ボル・ポト派の歴史は、1940年代の独立闘争期からごく近年に至るまでのカンボジアの歴史を貫く重要な柱のひとつである。日本語でこのような書物が用意されたことは、後学の者達にとって実に大きなメリットであろう。

本書の主題は「ボル・ポト革命とはなんだった」のか、という問いである。ボル・ポト政権成立まで

の経緯を述べ、政権下での虐殺・粛清の悲劇を紹介した後、著者は、ボル・ポト時代、すなわち1975年4月17日から79年1月6日までの「3年8ヶ月20日間」の犠牲者数を150万人前後とし、「（ボル・ポト派は一評者）政権にあった間、毎日約1100人ずつを死に追いやっていた」と述べる。そして、「こんな革命」になってしまった理由を、(1)現実から遊離した誇大妄想の「バブル革命」、(2)国民を人間ではなくいつでも処分できる家畜と見なす「人間不在の革命」、(3)中国やソ連、フランス等の革命の経験を強引に模倣した「レンタル革命」、(4)知識も判断力もない少年少女を指導者が思いきり使用した「子ども革命」、(5)民族浄化につながってしまうほどの「自主独立偏執病革命」、(6)異を唱える者は皆粛清されてしまった「ブレイキのない革命」、これら6点に整理している。

「ボル・ポト革命」の特色としてこれら6点を指摘するのに、用語の好みはあるにせよ、多くの異論はないだろう。しかし、まだ「ボル・ポト革命とはなんだった」のか、という問いの答えにはなっていない。さらに著者は最終章で、ボル・ポト派の指導者達が家族の絆を尊重し、晩年には仏教に帰依する姿を描いて、「彼らの革命は『家族』よりも『宗教』よりも弱かった」と述べる。「あとがき」では、彼らのこのような姿を「要するに、ボル・ポト派も普通の人間たちだった証拠といえるのではないか」と問題提起し、「普通の人間たちが一つの方向にめっちゃめちゃに突進したら、いくらでもこうしたこと（＝ボル・ポト虐殺革命一評者）が起り得る。だからこそ恐ろしいし、その歴史も知ってほしいと思う」と結ぶ。

こうして結局、「ボル・ポト革命とはなんだった」のか、という問いは読者の宿題として残されてしまう。あまりにも大きくて重い宿題である。著者なりの結論を出していないところに釈然としない読者もいるだろう。しかし、この問いの大きさと重さを示し得たところに、評者はこの書物のもうひとつの意義を見る。この問いは、その時代にたまたま巡り合わせたカンボジアの人々の個人的体験にとどまるものではない。

（アジア経済研究所地域研究センター）